

課題番号	Q19E-05
課題名 (和文)	[ただ居ること] ができる [衣・食・住] の場とコミュニティ形成拠点に関する研究
課題名 (英文)	A study of places of "food, clothing, and shelter" where people can "just be" and community building sites
研究代表者	所属 (学部、学科・学系・系列、職位) 未来科学部建築学科 教授 氏名 山田あすか
共同研究者	所属 (学部、学科・学系・系列、職位) 未来科学部建築学科 講師 氏名 荻原雅史
	所属 (学部、学科・学系・系列、職位) 未来科学部建築学科 研究員 氏名 村川真紀, 出口寛子
	所属 (学部、学科・学系・系列、職位) 大学院未来科学研究科建築学専攻 修士課程 氏名 岩波宏佳, 鈴木ひかり, 藤原卓巳, 岡田一希, 押尾萌加, 芝山竣也, 太田ひとみ, 加藤瑞基, 清水力, 森野耕司
	所属 (学部、学科・学系・系列、職位) 氏名

研究成果の概要 (和文)

日常生活に必須の行為である、【衣・食・住】が誘発する、人々に共有される場と、そのような場によって生じるコミュニティの形成に着目し、「居る」ことをその機能に内包する多様な事例を、建築的要素の寄与を含めて整理した。その拡がりには、ときに地域における医療・福祉の側面を有し、また民間の各種事業との連携やビジネスへの展開など多様な目的に至るステップとして利用される事例まで多様である。これらの事例を施設種別を超えて横軸のキーワードで整理し、オープンデータベースとしてウェブサイトを構築・公開した。

研究成果の概要 (英文)

We have focused on the formation of shared spaces and the communities created by such spaces, which are induced by the essential activities of daily life: clothing, food, and housing. A variety of examples based on "people being there" were organized, including the contribution of architectural elements. These examples are diverse, with some having medical and welfare functions in the community, and others being used as a step toward various purposes, such as collaboration with various private businesses and development into business. These case studies were organized by keywords on the horizontal axis beyond the facility type, and the website was constructed and opened to the public as an open database.

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究課題の着想と社会的背景

社会的状況の変化とともに、従来の医療・福祉機能施設は「ハードとソフトのパッケージ」と認識され、それが介護保険法やノーマライゼーション、個人の選択可能性の尊重などの観点から、ハードとソフトに解体され、それぞれを選択的に組み合わせることができるようになってきた。

我が国では、人口減小を伴う少子・高齢化の急速な進展のなかで、社会資源を活用しつつ社会全体の福祉・医療システムを相互の連携や調整を通して再構築することで、個人が尊重される「当たり前暮らし」の質を保障し、維持・向上することが求められている。そして、縮退する成熟社会の中では社会基盤施設とサービスが地域の雇用・生活・支援などの起点としての役割を増す。このため、地域に住まう多世代・多職種の人々が、従来の血縁（家族・親戚）や地縁（地理的近接性）を超え、医療・福祉・教育など興味関心必要な支援の共通性のなかで包括的かつ相互に支え合う広義の福祉を起点とする複層的コミュニティを構築することが必要不可欠である。一方で、日々の生活や就労などの日常の中で、場や行為を共有することによって生じる場や地域、人々との関係性に着目すると、その対象はより幅広く、また日常に根ざせばこそ自然で多様な関係性が構築されうる。これは、衣食住というキーワードで整理できる。【衣・食・住】の日常生活行為を共有する場によって、今日的なQOLと共助・互助における持続性をもつ新しいパブリックの場とコミュニティのあり方の検討に研究の主眼を置く。

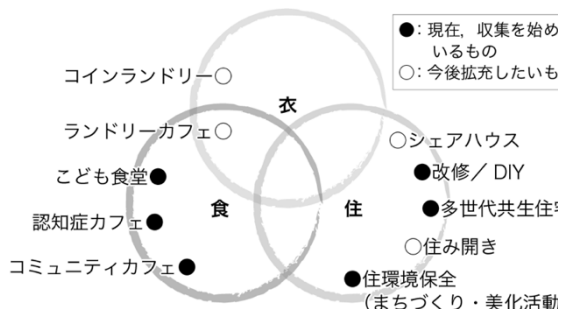


図1 着想のもととなった研究で収集している事例

(2) 研究の着眼点：衣・食・住に着目した既往研究

①【食】と居場所に関して、例えば建築や都市のあり方を、その場の設えによって生じる場面（Behavior setting）として捉え、建築的設えとその効果を「パタン・ランゲージ¹」として整理した Christopher Alexander は、まちのカフェを「堂々とまちに滞在できる居場所」と表現している。時代はくだり、2000年頃から地域の居場所としての「カフェ」が注目され、例えばニュータウンの下駄履き商店街の空き店舗を改修したコミュニティカフェが、日々の食事を契機とした人々の結節点として機能する実態などが報告されている²。さらに近年では、子ども食堂など食を契機として困難な状況にある人々の社会との結節点をつくったり、困難が生じないようネットワークを構築することにも注目が集まっている。

②【住】についてはヨーロッパにおける住宅を基盤とする福祉における多様な social mix のあり方³など、基本的な拠点として理解されているが、さらに住宅改修を契機とするコミュニティや関係性の構築^{4, 5}などの取り組みがある。

③【衣】については、都心部にコインランドリーが急速に増え、そこは時間限定的だが滞在を誘発する空間になっており、積極的に滞在を誘発するランドリー・カフェも注目されている。また、衣類のリサイクルや収集・修理・再販売を事業とする社会的包摂の仕組み等も実践例に挙げられる。

(3) 社会的動向

生活支援・公共の場と人々の関係性のあり方は今後、「施設から事業拠点へ」「血縁・地縁から利用縁へ」と変化し、「混在と滞在」の価値が増していくと整理できる。

① 施設から事業拠点へ この数十年の間に、人々の地域生活を支える様々な広義の福祉的施設や生活施設は、集約と解体を繰り返してきた。商店街は機能集約的店舗・スーパーに取って変わられ、それもやがて専門店街を内包するショッピングモールに一定のシェアを譲っている。生活支援の関連機能では、建物と機能の“パッケージ”

の解体、介護保険（2000年～）の施行とともに、ノーマライゼーションや個の尊重の価値観からの脱一斉処遇／大舎制、脱コロニー（隔離）、「施設」の住まい化・地域化、などの動きがあった^{注1)}。そして、例えばクリニックモールや共生ケアのように「解体された事業」が再び集まり、機能集約による新たな価値を生み出しつつある。施設設備における“建物と機能は一対一対応”、“一建物一用途”の原則は崩れ、「機能+そのための建築」パッケージである施設の【整備】から、事業（群）とそれをを行う場所の【利用】へと変化してきた。

② 血縁・地縁から利用縁へ 生活の外部的化が進むなかで、人の生活は様々な場における時間や経験の総体として捉えられ、「住まい」と「それ以外の場所」「住まうを支える事業の活動範囲」は不可分になりつつある。そして人々のつながりは、血縁や地縁（居住地や就労場所）に縛られない、場所や機能／サービスを媒介とした、場所や機能／サービスの利用という共通項が生み出す「利用縁コミュニティ」に置き換わっていく^{注2)}。これは自由で選択的で、個々人の自己決定の集積がゆるやかに形作る流動性の高いコミュニティである。「自己選択的であること」を前提に「互助」が期待される社会において、利用縁コミュニティは「互助」の歯車の軸として認識されていくだろう。

③ 混在・滞在という価値 こうした、事業の建物からの独立と集約、利用縁の積層によるコミュニティ形成を、混在と滞在が強化する。IT技術が発達・普及した時代に、物理的な移動や活動を誘発するには、これまでの経験や既存の価値観による検索・推薦の枠を超えた偶然の出会い性、思いがけない経験が有利である。機能別に整備されてきた施設にはない、多様性や複雑さ、わかりにくさが新たに価値をもつ^{文8)}。そして、ある場所が選択的に使われる、人を惹きつけるためには、要素の多様性に加えて、ただそこに滞在できること^{注3)}が重要だと考える。多様な滞留・滞在空間を設けた駅ナカ、休憩場所が点在するショッピングモ

ールやデパート、滞在型図書館や書店、市民の居場所としての公園など、滞在可能性はホスピタリティの向上材料となる。また、そこが多様な人々の多様な滞在の場所となることで偶然の出会い性も増す。

まずは「ただ居ること」ができる場所があり、多様な機能が混在し、偶然の出会いがある。そうした場合はさらに、人々に「共有される場」であることでその効果を増す。さらに、多様な人々による利用の蓋然性の観点からは【衣・食・住】という日常生活に必須の行為が伴うとより効果的と考えられる。

2. 研究の目的

以上より本研究課題の学術的問いを、こうした①日常生活に根ざした共有される場の多様な実態のすがた、そして②そのような場は、建築・都市の観点からどのように支援できるか、とする。

本研究課題では、日常生活に必須の行為である、【衣・食・住】が誘発する、人々に共有される場「ライフコモンズ」と、そのような場によって生じるコミュニティの形成に着目し、多様な【衣・食・住】ライフコモンズのあり方を総体として捉え、整理する。このとき、また、それらが目的や立地、建築的要素・設え、運営などどのように対応して利用者を想定し、また利用されているかなどの関係を分析する。さらに、それらのライフコモンズが利用者や利用者コミュニティにもたらす効果を把握して、その実効性を高めるためのハード・ソフトの条件を検討し、よりよい拠点形成に向けた知見を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

研究期間後半の新型コロナウイルス感染症拡大対策時期の各種制約も踏まえて、具体的に設定および遂行可能であった以下9つの課題に分割して実施した。

(1)居場所としてのカフェ

近年急激に増加している、テーマ型カフェ、居場所提供型カフェの事例収集を行い、その相対的位置づけを整理した。

(2)居場所としてのカフェのデザイン実践と検証

居場所としてのカフェの一例である、保育学生と保育者のための就活・保育活動支援カフェの計画と立ち上げに参画し、使われ方や評価の検証を行った。

(3)民間による地域の居場所と利用縁の実態

郊外などでの地域コミュニティ再構築の拠点として期待される住み開き、民間による居場所づくり事業とそこでの人的ネットワークの実態を調べた。

(4)都市空間のなかでの滞在と相互距離

パーク PFI など都市のオープンスペースにおける居場所化（滞在の誘発）が進められている。そうした空間での滞在実態を、相互距離に着目して調べた。

(5)イタリアにおける地域拠点と地域活性化活動

「地区の家」と呼ばれている、複合機能による私設公民館の視察を行い、事例紹介のレポートを作成して広く公開した。

(6)多世代共生住宅の事例収集と要件整理

高齢者世代や子育て世代など、多世代が共に住まう住宅の事例を収集し、具体例を踏まえ、多世代共生住宅としての成立の要件を整理した。

(7)一時的な居住を呼び込む「まちやど」の事例整理

定住人口の拡大によらない地域の消費や活力の指標として、関係人口や交流人口が注目される。宿泊を介した地域活性化の拠点の事例を収集・整理した。

(8)医療・保健機能が起点となるコミュニティ

薬局や医院の併設カフェや暮らしの保健室など、地域での日常的な「居場所」を提供し地域生活を支える医療・保健の拠点の事例を収集・整理

した。

(9)多様な事例のオープンデータベース作成と公開

衣食住とその周辺関連機能を持つ多様な事例を収集してデータベースを作成した。また、それら事例集を参加者が同時に編集できるオープンなシステムとしてオンライン上に公開するサイトの作成と公開を行った。

4. 研究成果

(1)居場所としてのカフェ

飲食提供が主のカフェからテーマ型カフェまで、今日の多様なカフェを対象に、滞在・居場所の観点から整理する。

カフェの役割や位置づけを「居場所」「体験・情報」「娯楽」「交流・コミュニティ」の4要素に着目して整理した(図2)。また、カフェでの滞在、着座位置選択行動の分析を行った。現代の多様なカフェは、サードプレイスとしての居場所性を有する他、他の目的達成の手段として用いられ、カフェ自体が持つ機能や要素は多岐に渡る。

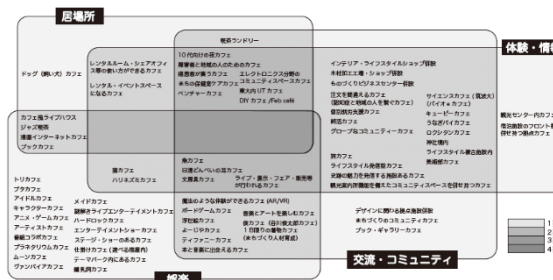


図2 テーマ型カフェの位置づけ

(2)居場所としてのカフェのデザイン実践と検証

「カフェ」と呼ばれる多様な居場所と飲食の提供をきっかけとする関係づくりやコミュニティ形成活動の一例として、保育士と保育者のための「就活カフェ」として開設されたPカフェの企画・開設支援とその検証を行った。

就活への意識付けと関係性に根ざした目的の遂行のため、日常的な滞在を誘発し、その延長に就活という当初目的に連結するプログラムを

提案した。そのための要素として、もともと構想されていた飲食できる場所と情報の提供機能に加えて、授業の課題や実習の準備に活かせる工房を提案した（写真1）。



写真1 対象テーマ型カフェの内観と外観

この結果、滞在や評価において日常的な利用を誘発し、「食」と「居る」ことに加えて目的要素の追加が利用の促進に有効であることを検証した。

(3)民間による地域の居場所と利用縁の実態

様々なコミュニティ拠点の活動が活発化している一方で、郊外では、地域での活動時間や関わり合いの機会の減少が懸念されている。コミュニティの再形成に向けて場所やサービスの利用という共通性が緩やかに形成するコミュニティを「利用縁コミュニティ」と定義し、郊外における利用者のコミュニティ拠点の選択の様子を整理した。住み開き等の地域活動が活発な埼玉市M区を中心にアンケート調査を行い、コミュニティ拠点の利用者の交流活動の場所選択の理由と場所を整理し、複数の場所を利用する場合はその場所同士の関係を整理して使い分けや連携の様子を把握した（図3、4）。

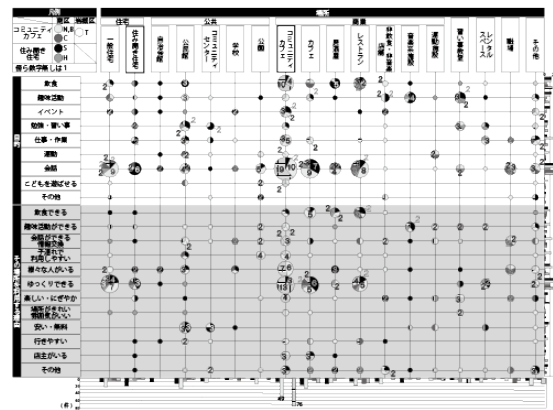


図3 コミュニティ拠点の利用目的と利用理由

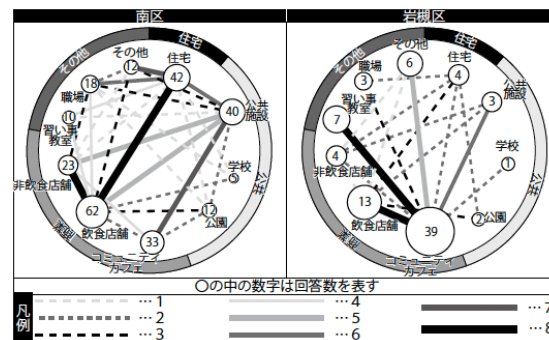


図4 複数利用する場合の交流場所の関係

(4)都市空間のなかでの滞在と相互距離

パーク PFI など都市のオープンスペースにおける居場所化（滞在の誘発）が進められている。また 2020 年には新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、三密の回避を期待して屋外の滞在空間が注目される。こうした屋外空間のうち、近年そのタイプが増えている、階段状の空間における滞在（以下；階段状着座滞在）の実態把握を行う。千代田区・秋葉原 UDX 内の屋外テラスと、豊島区・南池袋公園のサクラテラスを対象とした行動観察調査により、線状着座滞りに類する着座距離の粗密が確認され、また前後の距離感は横方向よりも大きく取られるなどの着座行動を整理した（図5、6）。

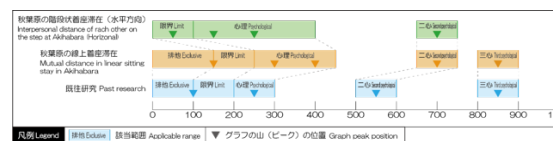


図5 秋葉原における相互距離の段階定義

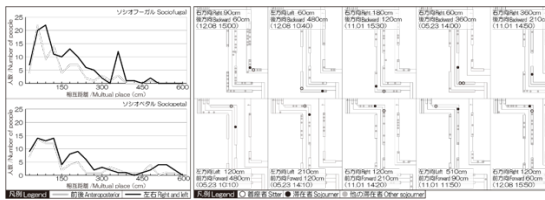


図6 南池袋公園滞在者の相互距離分布とその実例

(5) イタリアにおける地域拠点と地域活性化活動

イタリア北部で「地区の家」と呼ばれている、地域活性化や地域善隣活動の拠点の調査を行った。「地区の家」は、衣・食の機能を内包して運動や言語習得、職業訓練、居場所づくり、各種活動支援、趣味の充実などを地域住民が実現するための私設公民館のような事例である。こうした機能やあり方は国内事例にも紹介・反映されており、参考になる事例としてデータベースへの登録・公開を行った。同時に、中心市街地で活動する様々な主体や組織を束ねて複層的なまちづくりを展開するトリノやアレサンドリア等の事例について運営・管理者へのヒアリング・現地調査を実施した。



写真2 地区の家でのヒアリング

また、限界集落を通り越し、住民が完全に放棄した住居群を丁寧に再生し、集落全体をホテルにする動きであるアルベルゴ・ディフーズ (ADi)を展開するエミリア・ロマーニャ州ピアチェンツァの集落を訪問し、運営者へのヒアリング調査を実施した(写真3, 図7)。本成果は、既存建物の利活用により町ぐるみで宿泊を通した地域への来訪者や経済活動の呼び込みを行う「分散型宿泊」の研究展開への足がかりとなった。



写真3 アルベルゴ・ディフーズ (ADi) 宿泊棟の外観



図7 ADi 事例 Casa delle Favole 周辺配置図

(6)多世代共生住宅の事例収集と要件整理

多世代が共に住まう住宅の事例を収集し、インタビュー調査・現地調査を行った。

各事例の特徴の整理から、共生の様態は、オープン性、シェア性、混在性、多様性と説明でき、それらは建物形態や立地、機能の複合、利用者の想定等によって各事例を特徴付ける(図8)。「コミュニティ」の性格上、すべてがパブリックに対して開かれていることだけではなく、住民や会員に対して閉じられていることが内部コミュニティの醸成に寄与する場合もある。いずれにせよ、対外的な関係をいかに取るか、という点がコミュニティや事例のあり方を決定づける要素と言える。

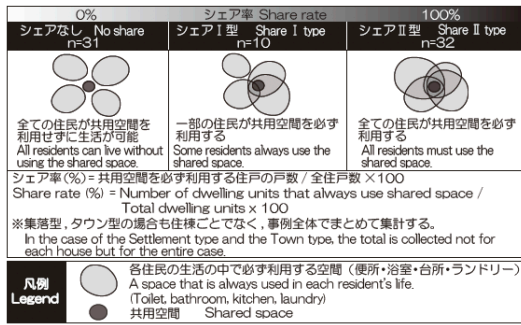


Fig.5 Classification of Shareness シェア性の分類

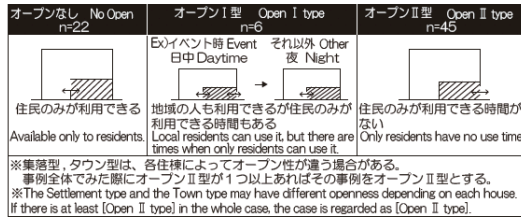


Fig.6 Classification of Openness オープン性の分類

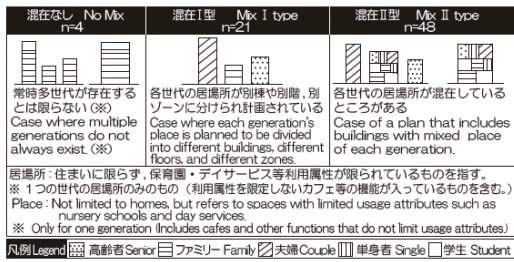


Fig.7 Classification of Mixedness 混在性の分類

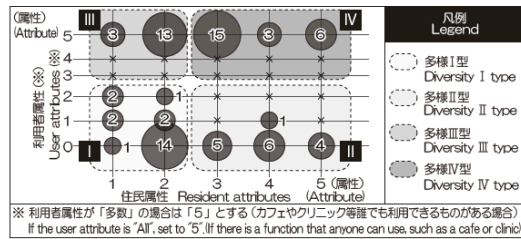


Fig.8 Classification of Diversity 多様性の分類

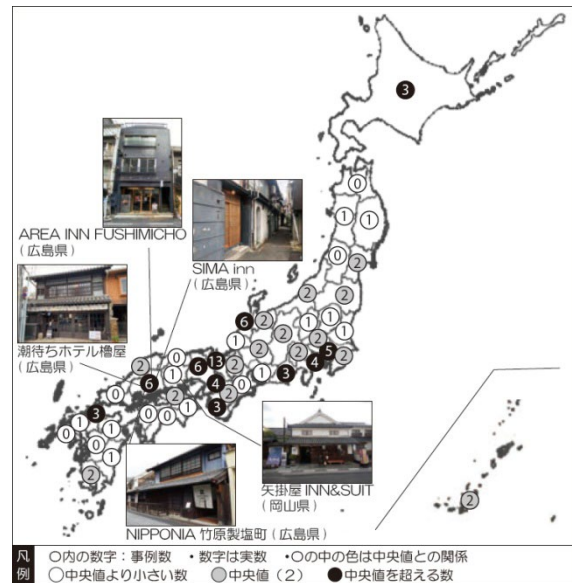
Table5 Comparison of Shareness, Openness, Mixedness, and Diversity of each building type

	各建物形態のシェア性・オープン性・混在性・多様性の比較			凡例 Legend	
	一体型 One building type n=46	集落型 Settlement type n=23	タウン型 Town type n=9		
シェア性 Shareness	56% 37% 11%	30% 48% 17%	33% 33% 22% 12%	○ なし No ■ I ■ II ■ III ■ IV □ 不明 Un-known	
オープン性 Openness	48% 39% 13%	73% 22%	100%	P 値	
混在性 Mixedness	78% 17%	43% 48%	44% 56%		
多様性 Diversity	17% 39% 20%	43% 22% 26%	67% 41%		
実測値 / Expected frequency	シェア性 Shareness	92.99%	120.34%	83.87%	0.63
	オープン性 Openness	84.78%	135.65%	86.67%	0.74
	混在性 Mixedness	132.70%	73.72%	0%	0.04
	多様性 Diversity	169.57%	0%	0%	0.10
調査値 / Surveyed frequency	シェア性 Shareness	84.78%	169.57%	0%	0.56
	オープン性 Openness	56.52%	155.43%	180.56%	<0.01
	混在性 Mixedness	119.69%	73.15%	67.97%	0.02
	多様性 Diversity	115.61%	77.08%	78.79%	0.58
期待値 / Expected frequency	シェア性 Shareness	148.37%	42.39%	0%	0.03
	オープン性 Openness	95.38%	127.17%	54.17%	0.62
	混在性 Mixedness	56.52%	141.30%	216.67%	<0.01
	多様性 Diversity				

図8 シェア性・オープン性・混在性・多様性

(7)一時的な居住を呼び込む「まちやど」の事例整理

深刻化する空き家問題や人口減少による地方部の衰退によって、集落・地域レベルでの持続可能なまちづくりや地域文化の維持・継承が課題となっている。そのような中、地域の文化や景観の保全にまちぐるみで取り組む、「町ホテル」「まちやど」「リノベーションホテル」などの施設が多くみられるようになった。これら多岐に渡る活動について形態や活動の把握・定義を横串で行った。日本国内における代表的な事例 96 例を抽出し、施設の立地的特徴と施設本体の特徴の分類を行い体系化すると共に、相互の関係性について整理をした。合わせて、事例の中から 5 事例について見学・ヒアリングを行い運営実態やまちとの関わりについて把握した(図9, 10)。



トの作成と公開を行った。

図9 抽出事例の都道府県分布

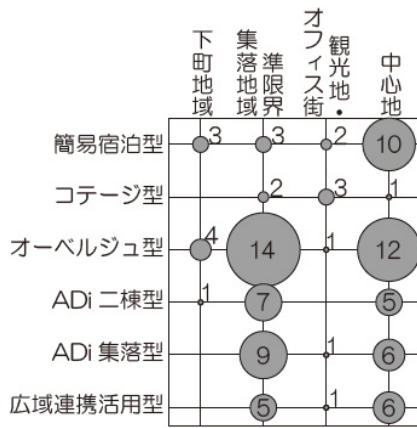


図10 立地特徴と施設本体特徴の関係

(8)医療・保健機能が起点となるコミュニティ

薬局や医院の併設カフェや暮らしの保健室、認知症カフェ、健康増進運動施設（メディカルフィットネス）など、地域での日常的な「居場所」を提供し地域生活を支える医療・保健の拠点の事例を収集・整理した。住民の心身の健康を積極的に守る互助的で多様なコミュニティを“医療・介護機能を起点に医療・介護・福祉の連携、病気・介護予防や健康保持の推進に資するウェルネス・コミュニティ”として統合的に捉え、事例収集と整理を行った。こうした拠点は、日常的に地域住民に利用されることで普段からの関係をつくり、互助・共助の関係を醸成する（図11、図12）。

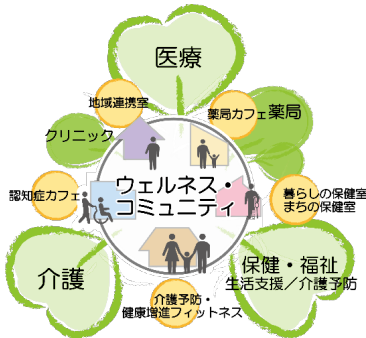


図11 ウェルネス・コミュニティの概念

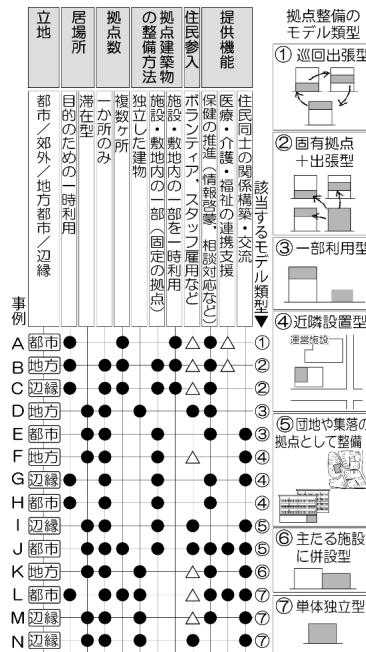


図12 ウェルネス・コミュニティのモデル整理例

(9)多様な事例のオープンデータベース作成と公開

衣食住とその周辺関連機能を持つ多様な事例を収集してデータベースを作成した。また、それら事例集を参加者が同時に編集できるオープンなシステムとしてオンライン上に公開するサイトの作成と公開を行った。

サイト構築にあたり事例の情報を幅広く得る際に必要となる事例の特徴を捉えた「検索キーワード」、類似した事例を探すための「情報の言語化」や「必要な知識」を持たずに、キーワードや類似事例を拡張的に閲覧できる仕組みとして【利用者属性/提供している活動/ハッシュタグ】を付与し、これら事例の見学・ヒアリング時の情報をもとに開設経緯やサービス内容と利用者の様子、それらに応じた建築の形態についてのレポート記事をWebサイトで公開した。このような、場の機能と有り様がもたらす効果に着目し、既存の施設種別や目的種別を超えた「横串の整理と評価」は、既往の例がない。このような研究アプローチとその成果は、既存の施設や機能種別という枠を超えた、地域に真に必要な場を構築するためのガイドラインとして、また今後の地域社会や多様なライフスタイル、ライフステージの変化に応じた

サポートの場の創造的な実現に寄与しうる (図 13)。

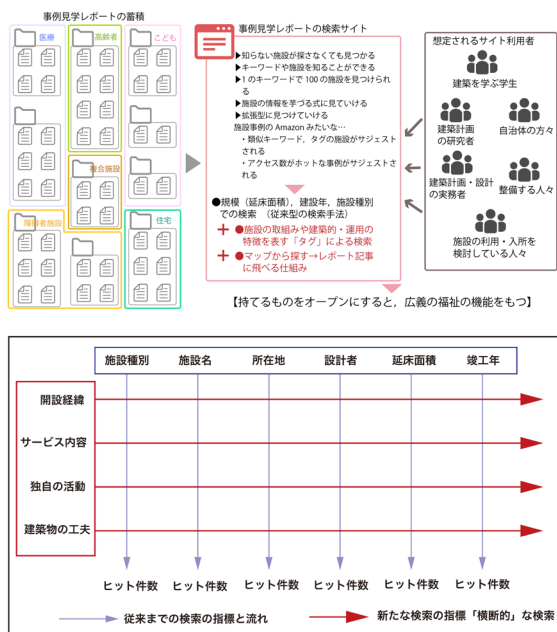


図 13 サイトのコンセプトと事例検索システムイメージ

5. 主な発表論文等

(研究代表者、共同研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 岩波宏佳, 山田あすか, 滞在・居場所の観点から見たカフェの実態と位置付けに関する研究, 日本建築学会 地域施設計画研究, Vol. 38, pp. 141-150, 査読あり
- ② 新実希帆, 齋藤美優, 山田あすか, 保育者のためのコミュニティスペース「びたカフェ」の利用実態, 日本建築学会 地域施設計画研究, Vol. 39, 掲載頁未定, 査読あり
- ③ 加藤瑞基, 山田あすか, 出口寛子, 子ども食堂の運営と利用の実態および空間的特徴—東京都で開催される子ども食堂を対象とした事例研究—, 日本建築学会 地域施設計画研究, Vol. 38, pp. 55-64, 査読あり
- ④ 安田結美, 村川真紀, 山田あすか, 新型コロナウイルス感染症による外出自粛期間における生活空間とストレス感の関係について, 日本建築学会技術報告集, 掲載頁未定, 査読あり

- ⑤ 森千紘, 山田あすか, 多様なコミュニティ形成の拠点となる住宅利用 —「住み開き」の運営実態の整理—, 日本建築学会 地域施設計画研究, Vol. 39, 掲載頁未定, 査読あり
- ⑥ 恵谷優希, 荻原雅史, 村川真紀, 山田あすか, 分散型ホテル・まちホテルの立地地域と建築・機能的特徴による類型化と運営概要の報告, 日本建築学会 地域施設計画研究, Vol. 39, 掲載頁未定, 査読あり

[学会発表] (計 6 件)

- ① 齋藤 美優, 太田ひとみ, 山田あすか, 都市空間における階段状着座滞在の様相に関する研究 その1 滞在者分布と相互距離の段階定義について, 日本建築学会大会学術講演 2020年9月
- ② 太田ひとみ, 山田あすか, 都市空間における階段状着座滞在の様相に関する研究 その2 各調査対象地の相互距離について, 日本建築学会大会学術講演 2020年9月
- ③ 清水力, 山田あすか, さいたま市におけるコミュニティ拠点と利用実態に関する研究 (OS論文), 日本建築学会大会学術講演 2020年9月
- ④ 森野耕司, 山田あすか, 荻原雅史, 佐藤栄治, ある中山間地域における今後の地域の持続に関する都市部出身の大学生と住民の意識調査 —地域の現状把握と今後の地域のあり方・暮らし方の検討ワークショップの結果から, 日本建築学会大会学術講演 2020年9月
- ⑤ 太田ひとみ, 山田あすか, 都市空間における階段状着座滞在の様相に関する研究, 人間・環境学会大会 2020年9月
- ⑥ 安田結美, 山田あすか, 外出自粛要請における閉所ストレスと生活空間に関する研究, 人間・環境学会大会 2020年9月

注釈

- 1) 例えばグループホーム、小規模多機能型居宅介護、介護と介護予防を同じ場所で実施するデイサービス、小規模保育拠点など、地域資源を活用しながら地域のニーズに即してサービスの展開をしてきた。
- 2) 利用縁コミュニティは、参加と離脱、そのタイミングは自由で、参加の度合いも人それぞれ異なる。コミュニティのメンバーは興味関心や必要な支援、お気に入りの場所などなんらかの「共通項」によってゆるやかに関係する。例えば、なんとなく顔見知りのカフェの常連、朝夕の送迎時にすれ違う程度の保育所の保護者同士、図書館の勉強スペースでの顔見知り、子育て支援の互助アプリの利用など、程度の関係から、サークルやサロンなど共通の趣味や目的で集まる人々も居る。人々は多くの利用縁コミュニティに属し、それらを状況に応じて使い分け、生活に応じて自然に移り変わっていく。
- 3) 建築家・渡辺武信は、居心地がよい、とは「ただ居る」ことができるかどうかである、として、住まいの居心地は“どこか (there) ではないここ (here) 性”にあると説明した。

参考文献

- 1) クリストファー・アレクザンダー著、平田翰那訳：パターン・ランゲージ - 環境設計の手引き、鹿島出版会、1984.12
- 2) 余錦芳、松本真澄、上野淳：多摩ニュータウン高齢者支援スペース・福祉亭利用者の地域生活様態とその地域社会における意義 - 多摩ニュータウンの高齢者支援スペースと利用者の地域生活様態に関する研究 (その2)、日本建築学会計画系論文集, Vol. 77, No. 671, pp. 2025-2034, 2012. 09
- 3) Giulia MELIS, Giulia MARRA, Elena GELORMINO : HOUSING AND SOCIAL MIX, Equity Action, Work Package 6 - Literature Review, 2013.11
- 4) 土井脩史, 高田光雄, 江川知里: 住みこなしに着目した賃貸集合住宅居住者のDIY ニーズに関する研究, 日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系 (54), pp. 61-64, 2014. 05
- 5) MAD City : セルフビルド改修を前提にした不動産業が中心となって人々をつなぎ、まちづくりを行う取り組み事例, < <https://madcity.jp> >